

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520400
 研究課題名（和文）初等英語教育における ALT, JTE および HRT の特性を生かした教育方法の研究

研究課題名（英文）A Study on the Roles of ALT, JTE and HRT in Elementary School English Education and Possible Teaching Methods

研究代表者

田近 裕子 (TAJIKI HIROKO)
 津田塾大学・学芸学部・教授
 研究者番号：80188268

研究成果の概要：

小平市をはじめとする近隣および首都圏の小学校や教育委員会において教員研修を行い、内容重視の英語活動に関する理解を広めると共に、担任(HRT)の実践力向上への支援を行った。また、HRTによる英語活動についての日本各地の成果のまとめをするために、2008年12月13日と14日にフォーラム「学級担任主導の英語活動——実践報告」を津田塾大学AVセンターで開催した。HRTの持つ高い英語活動指導力を確認することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,000,000	0	1,000,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,400,000	510,000	3,910,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：初等英語教育、ALTの活用、JTEとHRTの役割、ティーム・ティーチング、教授法研究

1. 研究開始当初の背景

日本あるいはアジアおけるだけでなく、世界的傾向として、外国語学習の開始年齢が中学校から小学校へと下がっている。いまや先進工業化社会においては、英語学習を初等教育段階から導入することが一般的となりつつあると言えよう。

日本社会でもこの流れを汲んで、2011年度から小学校5、6年生における英語活動が必修となるが、本研究に取り組み始めた2

005年度の時点ではそのような決定はまだなされていなかった。ここ数年における日本社会の英語活動に対する積極的取り組みは大いに評価すべきものがある。

本研究を企画した2005年度頃は、ALT(assistant language teacher)とJTE(Japanese teacher of English)とHRT(homeroom teacher)のいずれが教えることになるかについてはまだまだ明確ではなかった。そこで、この3者の可能性についてそれぞれの特性を明らかにし、今後の初等英語教

育のあり方の指針と、今後の取り組みに寄与できることを提言しようと試みた。

現在は、2011年度よりHRTが担当するということが決まっております。したがって、この新たな枠組みの中で、HRTとALTとJTEの関係を提言していくのが、本研究の使命であると言えます。

2. 研究の目的

初等英語教育においては、まず教授法の研究が手つかずの状態であることから、小学生という発達段階の学習者にはどのような教授法が妥当かを検討する必要がある。小学生は中学生とは大きく異なり、5、6年生と言えどもまだ母語母文化の形成期にあることに違いはない。したがって、小学生に英語を教え、この時期に外国語学習を導入することは、中学生の場合とは決定的に異なったことであるという認識が必要となる。本研究ではまずこの点を明確にすることを目的の一つとした。

さらに、このような認識に立って英語活動を推進するとしたら、具体的に、誰が、何をどのように進めるのが最も望ましいのかを検討することも目的の一つとなる。

3. 研究の方法

(1) ALTについて

公立小学校における英語活動の授業で、ALTが教えている実際を参観し、ALTの考えや取り組みについて理解に努めた。また、言語習得の視点からの提言や、教材や指導のアイデアの提案も行った。

(2) JTEについて

実際のJTEに、さまざまな英語指導法の中で、特に内容重視の英語活動のプランや教材の開発について取り組んでもらった。さらに、これをHRTに実践してもらい運びとした。

(3) HRTについて

授業実践のために必要な英語の指導や言語習得への理解、教室での実践活動の立案や実践に取り組んでもらった。複数の公立小学校において、教員研修と研究授業を頻繁に繰り返し、英語活動のあり方を、全校で探り、この研究体験を全校教職員で共有した。

(4) 内容重視の英語活動教授法研究

教材として *It's for the Kids* モデルプランの開発を行った。これは、実践的に授業で使ってみて、改良を重ねるためのプランである。

4. 研究成果

(1)

まず、ALT、JTE、HRTの3者の役

割については、以下のことが言える。

内容重視あるいはテーマ中心の言語教育法を実践していくとしたら、それに関わる教員はどのような人になるのか。現在小学校で英語教育がおこなえる可能性のある人材は、担任(HRT: homeroom teacher)と言語補助員(ALT: assistant language teacher)と英語専科教員(JTE: Japanese teacher of English)である。HRTは小学校教員免許を持っていて既に小学校の教室で教えており、子どもたちについて一番よく知っている。しかし、英語については自分で使うこともめったにない教諭も多数含まれる。ALTは、英語のネイティブ・スピーカーであったり、あるいは、それに近い、英語使用に熟達した人物である。しかし、小学校の教員免許も言語教育の専門的背景も持たないのが通常である。一方、JTEは、通常は日本人で英語教育の専門的背景があり、外国語学習とはどのようなものを学習者の視点から分かっている。しかし、通常は小学校免許を持っていない。

内容重視あるいはテーマ中心の英語教育を行おうとすると、どのような人材が指導者として必要かということ、児童の生活や学習の背景を把握できて、目標言語の使用に秀でて、さらに、言語学習の専門性ある人物である。つまり、HRTとALTとJTEの利点をすべて生かした人材があれば、内容重視あるいはテーマ中心の英語教育法はその目的を達成すると考えられる。しかし、このような人物はなかなか見出すのが困難であるし、もしいたとしてもこの人材をすべての公立小学校で雇用することは非現実的である。そこで、現在なしうることは、HRTとALTとJTEのそれぞれの利点を生かして、組み合わせで教育を行っていくことである。HRTとALTとの組み合わせであれば、子どもたちのことをよく理解している先生と英語使用の熟達者と

で授業を行い、HRTとJTEとであれば、子どもたちのことをよく理解している先生と言語学習について学ぶ視点と教える視点を併せ持つ先生とで教える。また、ALTとJTEとの授業であれば、英語使用について学習者と教える側の視点を入れながら高度な言語使用を行うことができる。別の言い方をすれば、HRTがない場合には子どもたちの姿が把握しにくい問題があり、ALTがない場合には英語の正確さや自然な使用について不十分かもしれない、またJTEがいなければ言語学習の方法論についてどうしていいかわからない場合もあるであろう。

現状では、以上の3つの可能性の入手可能なものを活用する形で行う英語教育・活動を取り入れ、不足する点についてはしばらくはあるものを活かす工夫でやっていくのであろう。いずれ、たとえば小学校教諭の資格に英語使用能力が伴うような要件が付加できればHRTが中心になり、それにしばしばALTかJTEが入る形で行っていくのが妥当ではないだろうか。これは、大きな変革を伴う提案になるが、21世紀の世界を見渡してみると、小学校教諭の資格を得るには少なくとも外国語がひとつは使えることが要件となる可能性はおおいにありうる。初等教育はそれくらい大切なものになっていくのではないだろうか。このHRTが教えることのできる方向性が望ましい理由のひとつは、内容重視あるいはテーマ中心の英語学習においては、子どもたちの認知レベルや興味、関心、理解力の把握が大きな要素となるからである。この作業に秀でたHRTが中心になって、自ら英語で英語を教えることができれば、これは小学生にとっても大切な社会人としてのロール・モデルたりうる。このような意味でHRTの果たす役割はきわめて重大である。今後の小学校教諭のあり方として、このよう

な広域コミュニケーション語が扱える人材ということが言明できると、小学校での外国語教育の位置づけも安定したものになっていくであろう。この場合のプラスは、外国語教育を日本語あるいは全般的な言語教育という枠組みから見て、子どもの言語発達を測定あるいは企画していくことができるという点にある。

(2)

次に、教授法研究の成果として、内容重視の教授法開発およびその教材について触れよう。

内容重視あるいはテーマ中心の言語教育は実はさまざまところで既に行われているが、小学校1年生から6年生までの週1コマ、概ね各学年30コマを前提としたプランが(財)津田塾会編による*It's for the Kids*というモデルプランとして提示されているので、これについて検討しよう。この渋谷区モデルプランは、テーマ中心という流れで企画され、HRTとALTとのチーム・ティーチングで公立学校で行われるものである。

まず、テーマの年間プランについて述べ、その後で各レッスンの内容をその特徴に触れながら見ていこう。このモデルプランでは、1年生から6年生まで、9つのテーマ(各テーマにつき約3回のレッスンとして、平均27レッスン分のプラン)で英語の授業を行うことを示している。それぞれのテーマは、食べ物、動物、社会生活、世界の言語、世界の国々、遊び、音楽、スポーツなど、必ずしも英語に限ってはいない。これらは、子どもたちが学校の社会科や理科や音楽や生活科などで学ぶこと、すなわち子どもたちの学校生活の延長線上で身近で興味の手持てることについて英語で学ぶ工夫がなされている。この工夫の背後には、Multiple Intelligences(多重知能)を活用して、子どもたちに英語に取り組ませようという理論的背景がある。

このモデルプランの特徴は、英語の言語構造にあわせて授業を組むのではなく、子どもたちの発達に合わせてテーマを選び、それに沿った英語表現を授業で導入していく点である。したがって、英語の文型や語彙に関しては、体系化はされない。では、文型や語彙はどのように習得されるかといえば、繰り返し別のテーマで同じような文型や語彙を用いた表現が再利用されることから、子どもたちが思い出しながら新しいことに挑戦することが前提とされている。

語彙や文型がランダムになる問題に対して、具体的にはできるだけテーマの切り口は違っても、同じ語彙や文型が繰り返して使われる工夫をしている。たとえば、4年生のユニット5 My Town で導入した school, library, hospital, supermarket, convenience store, station, post office, park, museum, cinema, restaurant のうちの多くの語彙は、6年生のユニット4 Around Town では、library, school, swimming pool, museum, restaurant, supermarket, department store, souvenir shop, gym, train station, hospital, convenience store, flower shop, bookstore, post office, park として、再利用される。

語彙の再利用の他の例では、たとえば、3年生のユニット3 The Body で導入された head, shoulder, knee, toe, eye, ear, mouth, nose, leg, foot, arm, hand, stomach のうち、arm, leg, foot, hand, head, body が4年生のユニット6 Robots で再利用される。このようにテーマは人体からロボットに変わるが、使われる語彙の共通部分が活用されて、子どもたちにとって飽きないかたちでの繰り返しが工夫されている。

文型も、テーマが変わっても随所に繰り返しがなされている。たとえば、4年生のユニット3 Abilities で Can you...?, I can..., I

can't...が導入され、その後ユニット6 Robots で Can it...?が使われる。また、6年生では、ユニット5 & 6 Famous People で「誕生日、年齢、出生地（国）、家族、好きなものと嫌いなもの」の表現が導入され、これが、ユニット8 Book of Us やユニット9 Movie では、自分のことや英語圏の登場人物のこととして、「年齢、住所、できること、仕事、朝食、ペット、好きなもの」の表現として繰り返し用いられる。

本モデルプランでは、授業科目との関連で組み立てたレッスンが提示されたが、これは実際に授業で子どもたちが取り組んでいる学習とのかかわりで生み出されたものである。したがって、学校によってはもっと異なった内容やテーマを中心にプランを作ることが可能である。ここで、既に述べた MI (Multiple Intelligences) 理論が活用できる。理科に関心の子よい子どもたちあるいは学校であればその学習内容や子どもたちの興味に従って、たとえば火山の噴火について学んでも良いし、海底や地上に住む、あるいは空を飛ぶ生き物についてのテーマを展開しても良い。

内容重視あるいはテーマ中心の教材の一つとして、津田塾大学の大学生と大学院生が近隣の小学校の児童のために開発したプログラムに「米」をテーマとしてもものがある。「お米ができるまで」「日本のお米」「おにぎりパーティ」「世界のお米」「世界のお米料理」とレクシンプランがあるが、どれも子どもの知識や理解力に合わせて内容を教えると同時に英語を導入するプランである。このような教え方は、たとえば、オーストラリア領事館で開発した「オーストラリア・キット」を使って、オーストラリアについて学ぶ過程で、英語が導入されるというやり方も可能である。テーマとしてはオーストラリアを中心と

してもよければ、異文化理解教育に活用してもよい。

このような試みは、日本では岐阜県多治見市の笠原小学校でおこなわれている。笠原小学校の試みは、そもそも中学校との一貫教育に英語学習を活用しようとしたもののようなものであるが、日本でも先進的な「文部省研究教育開発学校」の取り組みとなっている。この小学校では、CBAE(Content-based Approach in English)として、「一言でいえば、『内容を重視した学習』のことである」(*New Crown 授業通信別冊22号より)としている。教科担任(JTS: Japanese Teacher of the Subject)と、ALT (Assistant Language Teacher) と、JTE (Japanese Teacher of English) の3者が協力して、英語で行われる教科の授業を推進している。5年生では社会科地理的分野のコンテンツ学習として「日本・世界の国土」を、6年生では「世界の学校生活」「日本の遊び・アメリカの遊び」を行っている。この取り組みでは、さらに中学校でも内容重視の英語学習を充実させている。笠原小学校・中学校の試みの特徴的な点は、このようは内容重視の英語学習は従来、聖徳小学校や昭和女子大学附属昭和小学校などの私立で以前から英語教育に取り組んできた所では既に行われてきたことだが、公立小学校においてこのような試みがなされていることは大いに注目に値する。また、本報告書で紹介したモデルプランもテーマ中心のアプローチとして注目すべきである。

(3)

最後に、教員研修および実際に近隣の小学校等で行った研修および、特にHRTを中心とした教授法開発研究をまとめると以下である。

- ①小平市立の全小学校19小学校における教員研修を行い、小学校英語活動のあり方を理論と実

践において伝えた。本研修は教育委員会との協調のもとに行われた、学内全教諭に対するもので、学校全体で小学校英語に携わるという取り組みを促す効果があった。このような実践的な研修を行うことにより、教員にとってある程度安心して2011年の必修化を受け止めることが出来るようになった。

- ②小平市だけでなく、国立市教育委員会、西東京市の小学校、国分寺市の小学校などを訪問し、そこでの研修を通して、内容重視の英語活動について理論と実践において理解を広め、HRT(担任)への働きかけを行った。特に、夏期研修を本学で行い、毎年60人余の小学校教諭に対して、授業プラン作成および活用できる歌やゲームやアクティビティなど、授業支援となる素材や資料を十分に提供した。

- ③交流館自主フォーラム「小学生英語のひろば」の活動として、春の講座、夏の英語劇指導、「Let's国際交流」などの活動を行い、小学生の英語への取組について研究すると同時に、学生による小学生へのかかわりの実現とその指導を行った。

- ④HRTによる英語活動について、日本全国からの研究成果をまとめるために、2008年12月13日(土)と14日(日)に津田塾大学AVセンターにおいて「学級担任主導の英語活動—実践報告」と題してフォーラムを開催した。宮城県(1校)、東京都(4校)、岐阜県(1校)、鹿児島県(1校)の小学校からの報告と、佐賀県(教育委員会)の講演および関係研究者により、小学校英語活動におけるHRT(担任)の主導的役割の実績について報告を行った。いずれも完成度の高い実践報告であり、参加者から講評を得ることができた。本フォーラムにおいては、HRTの授業内容に関する指導力や創意工夫の優れた点が望ましい形で引き出され、HRT主導による英語活動の今後方向性が明らかになったと言えよう。一方、英語の言語的指

導の点ではさらに研究を重ねる必要があることなども明らかになった。

このフォーラムの目的の一つは、H R T（学級担任）が中心となって英語活動の授業を展開する場合、どのような特性を生かせるのかを検証することであった。また、今回の実践報告が、これから開発すべき初等英語の教授法の発端となることをそのねらいとした。発表内容は以下であった。

- 「ハロウィーンを楽しもう」（5年生）（「楽しくコミュニケーションする英語活動～担任主導でALT・地域人材とともに作りあげる指導の工夫～」）東京都西東京市立碧山小学校
- 「伝え合う内容を重視した英語活動及び英語学習の在り方」岐阜県多治見市立笠原小学校
- 「自らコミュニケーションをとろうとする児童の育成～英語との豊かな出会いを通して～」東京都国分寺市立第二小学校
- 「実践的コミュニケーション能力の基礎を培う『楽しい小学校英語科』の授業の創造」鹿児島県薩摩川内市立平佐西小学校
- 「国際コミュニケーションの素地を創る英語活動～高学年の知的好奇心を刺激する活動を通して～」佐賀県教育センター情報科教育課程支援担当
- 「小学校で英語を苦手にならないために」小学校英語教育推進特区認定の4年間の活動～東根スタイルの提案～」宮城県角田市立東根小学校
- 「ことばの力を築く英語活動—6年生の一年間を有効に」（拠点校としての2年間の研究概要およびそれを踏まえての6年生の授業を作り上げていく工夫について）東京都新宿区立戸塚第一小学校
- 「地域参画型の授業を創る」—「玉川兄弟物語」東京都小平市立小平第四小学校

これら各小学校からの発表では、基本的に内容重視の英語活動が紹介された。担任の行う英語活動では、内容重視の授業展開が最も適しているということが言える。本フォーラムで紹介された英語活動が、H R Tの知っている児童の知識や発達状況に合わせた地域性の高い内容を中心に展開された英語活動の紹介であった。この点でも、各小学校からの発表は今後の教授法開発への一つの提言となった。

なお、本フォーラムでは、参加者の情報交換会や大学生企画の絵本を用いた教室での英語指導法なども紹介され、参加者にとって初等英語が授業だけではない広がりのあるものであることが示された。

本研究のしめくくりとして上記のフォーラムが開催されたが、そこで提示された英語活動の内容は、今後の初等英語教育へのひとつの指針となったと言えよう。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田近 裕子 (TAJIKI HIROKO)
津田塾大学・学芸学部・教授
研究者番号：80188268

(2) 研究分担者

林 さと子 (HAYASHI SATOKO)
津田塾大学・学芸学部・教授
研究者番号：50228574

高橋 裕子 (TAKAHASHI YUKO)
津田塾大学・学芸学部・教授
研究者番号：70226900

吉田 真理子 (YOSHIDA MARIKO)
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：10230765

川上 典子 (KAWAKAMI NORIKO)
鹿児島純心女子大学・国際人間学部・准教授
研究者番号：90310066